

# 2025年度オープンキャンパス実践報告 — 保幼コースの実施内容と教育的意義 —

Report of Open Campus at Kurashiki Sakuyo University in 2025  
— Events and its Meaning —

田岡 由美子・山本 智子・横田 咲樹  
Yumiko TAOKA・Tomoko YAMAMOTO・Saki YOKOTA

## はじめに

近年、受験生確保のために大学の学びや環境についての情報提供や、受験生自身の興味ある専門分野における事前の体験学習であるオープンキャンパス開催は、いずれの大学にとっても自明の取り組みになっている。本学の入試広報室に伺ったところ、くらしき作陽大学のオープンキャンパスは2006年から食文化学部と音楽学部において実施され、翌年2007年から子ども教育学部も実施したとのことであった。その内容としては、学部学科の紹介、絵本作り、ピアノと歌の体験レッスン、子育てコーナー、キャンパスツアーなどが企画されたそうである。来場した高校生は、2007年6月30日に50名、7月21日に23名とのことである。

その延長線上にあたる今年度（2025年）は5月24日を皮切りに、6月22日、7月19日、8月23日の各土曜日に開催された。とりわけ、6月、7月、8月の保・幼コースについては、この春本学に着任したばかりの子ども教育学部の教員3名が担当した。本稿は、3名がそれぞれに模索しながら実施したオープンキャンパスにおける模擬保育の実践報告である。この実践報告の作成を通して、あらためてオープンキャンパスの意味を確認し、より魅力的なオープンキャンパスにおける模擬授業の内容や在り方について振り返り、今後どのような試みや工夫が必要かについて考える材料としたい。

### （1）6月の試み 一のびのび！ピタピタ！感触遊び

—スライムを作ったり、小麦粉粘土、片栗粉粘土で遊んだりする体験

■担当者と学生スタッフ：山本智子、田岡由美子、3年生2名

■参加人数：高校生34名、保護者25名

■実施日時：6月22日（日）第1回13：20～13：50、第2回13：50～14：20

■実施場所：2号館2階213号講義室

■目的：

- ①くらしき作陽大学での学生生活を疑似体験し、保育・教育の学びに興味や意欲をもつ。
- ②参加者同士が協力してスライムを作ったり、小麦粉粘土、片栗粉粘土を実際に触ったりして、乳幼児期の子どもの遊びを体験しながら、保育・幼児教育に関心をもつ。

■内容：

第2回のオープンキャンパスのイベントは、スライム、小麦粉粘土、片栗粉粘土などで遊んで、実際に参加者がいろいろな感触の違いやその不思議さ等を体験することを通して、感触遊びの楽しさや子どもにとっての意義を知ることができるようにした。

遊びに入る前に、まず、参加者がイベントの部屋へ1歩入った瞬間、大学での保育・幼児教育コースの学びを見て分かるということを意識した環境の構成に注目できるように、周回してから席に着くよう案内をした。

環境の構成の具体的な内容は、学生の授業の様子を、写真、制作物、課題（ドキュメンテーション・壁画・手作り遊具）等で展示したり、最新の保育・幼児教育に関する国の動き、海外の取組等

を、書籍の写真で見えるように準備したりした。そして、BGMで保育ソング等、保育・幼児教育の現場で使用する明るい曲を流し雰囲気盛り上げたり、学生の授業風景、学生が実際に授業で栽培している夏野菜等の生長過程や栽培物を使用した模擬保育の様子、丁寧な教員の課題添削の実際をスライドに流したりして紹介した。

参加者全員が室内の様子を見てから着席したところで、まず学生スタッフと教員が、名前、好きなこと、なぜ作陽に入学したか（学生）、あるいは本校の好きなところを書いた（教員）画用紙を掲げながら自己紹介した。これは参加者に在校生や教員の存在や大学生活を身近に感じて親しみを持ってもらうためである。

そして、よいタイミングで参加者の目の前に、学生スタッフが一人一人の参加者へ材料を手渡しして、これから自分のスライムを作ることに興味をもてるように、学生スタッフと教員が温かい声をかけて回った。また、工程の途中では参加者同士が、自分とは違う色のスライムを交換したり、用具を共同で使用したりすることを取り入れて、初めて出会う参加者同士が温かい雰囲気の中で交流できるように配慮した。

このイベントでは、季節に応じた遊びが経験できる、失敗がない、感触や色の変化が楽しめるということを、企画・準備段階から計画していた。蒸し暑いこの時期に、見た目にも涼しく、ヒンヤリとした感触が楽しめることは、乳幼児のみならず参加者も同じであり、おもわず「わあ固まった!」「すごくきれいな色になった」「気持ちいいからいつまでも触っていたい、癒される」等とつぶやく様子が見られた。

また、使う材料により、感触が違うことに気付いて、片栗粉粘土では固形になったり液状になったり変化することに保護者も夢中になっている場面が見られた。

最後に担当教員から、乳幼児は遊びを通して感覚の発達が促されることや、身近なものを遊びに取り入れることで子どもの発想や工夫につながることを説明し、保育・幼児教育への関心につなげるように配慮した。

また、安全面には十分に留意し、アレルギーへの配慮や使用する材料の衛生管理も徹底した。同時に、保育をする上で安全な環境づくりや危機管理は重要で、子どもの命を守るために行われていることについても説明をした。参加者からは、そのようなことまで配慮されていることを初めて知ったという声も聞かれた。

#### ■振り返り：

##### ・安全管理・衛生管理について

参加者の個々の状態が分からない（アレルギーがある等）状況であり、一つ一つの触る原材料を徹底して調べ、事前にどういった原材料（アルコール、小麦粉、芋でんぷん等）を手で触るかを説明・確認しながら実施した。また、粘土は大量に使用するものの、衛生面を考慮して温度管理するため、前もって早くから準備ができず、冷蔵庫を活用しながら、全ての教材を前日・当日の朝に時間を費やして行った。感触を楽しむ遊びの楽しさを感じてもらうためには、まずは安全面を徹底し、安心して楽しんでもらうことが大変重要である。

##### ・説明や声掛けの大切さについて

スライムや粘土は感触や変化が楽しめる教材であるが、ただ遊んでもらうだけでは、保育・幼児教育の魅力につながらない。学生スタッフが「本当に不思議ですね」「この感触はどうですか」「是非、試してみてください」と保護者へもしっかり声をかけていたことは、本当に重要で、このイベントに必要なことであった。また、教員の説明にも、しっかり聞き入っている様子が見られたことは、自身も驚きであった。保育・幼児教育への関心は、一人一人の参加者（保護者も含めて）に対して、親しみをもった丁寧な説明や温かい声掛けが欠かせないことを感じた。

またイベント終了後に学生や教員に親しみを感じて、進んで質問をする学生や保護者の方が多く見られた。学生スタッフに励まされて「プレゼンテーション型で入試をしてみようかと思う」と言って帰った参加者もいた。

・二部制について

イベントの参加に関して、どうしても1回目の参加者が多くなってしまい、たとえ二部制にしても均等の参加にはつながらなかった。2回目があることも伝えたが、その場で柔軟に2回目に変えようとする様子は見られなかったので、その場で1回目と2回目に分かれてもらうことは難しいことを感じた。



(山本)

(2) 7月の試み ―風鈴づくりとマーブリング

■担当者と学生スタッフ：横田咲樹、山本智子、3年生3名、1年生2名

■参加人数：38名（3年生22名、2年生13名、1年生2名、その他1名）

■実施日時：7月19日（土）

■実施場所：2号館3階312号室

■目的：

- ①学生生活のようすを知り、くらしき作陽大学子ども教育学部への進学に興味や意欲をもつ。
- ②偶然の色や形による造形活動を体験し、その楽しさを感じる中で、保育・幼児教育に興味をもつ。

■内容：

第3回オープンキャンパスのイベントでは、風鈴の制作とマーブリング技法の体験を設定した。活動を行う室内の環境構成は、①授業内で作成した学生の作品、②授業やゼミナールのようすを伝えるスライドショーとポスター、③絵本、④幼児教育における研究者の肖像写真と書籍、⑤乳幼児向けの音楽（BGM）であった。

風鈴作りのためには、組み合わせることで風鈴の形になる材料を用意した。材料は、円状に切った和柄等の折り紙（6枚セット）・短冊・毛糸である。毛糸は、風鈴の外見となる折り紙がずれないように、マスキングテープで滑り止めを付けた。短冊は、マーブリング技法によって模様を付けたものであり、マーブリング技法体験の導入となっている。

マーブリングで使用した素材は、洗濯糊と水を混ぜたマーブリング液と、食器用洗剤と水を混ぜ

たアクリル絵の具である。既製品を使用しなかった意図は、既製品が原色だけであったためである。白を含めた絵の具の混色によって、風鈴らしい涼しい印象の色合いを出せるようにした。活動後には、偶然の色や形を楽しむ活動を設定した意図や、造形表現による乳幼児の発達過程を伝えた。

#### ■振り返り：

進学先や大学卒業後の進路について考えている高校生とその保護者に対して、「くらしき作陽大学で」「保育・幼児教育について学びたい」と思ってもらえるようにすることが、本稿で取り上げるオープンキャンパスの目的である。くらしき作陽大学で学びたいという意欲をもつためには、本校の学生が意欲的に楽しみながら授業に臨んでいるようすや、学生の温かく明るい雰囲気が行きわたることが重要であると考えられる。保育・幼児教育について学びたいと思うためには、保育・幼児教育の面白さを感じられるようにすることが求められるであろう。

学生や授業のようすは、物的・人的環境によって伝えられるようにした。物的環境とは、前述の「内容」の環境構成で挙げた①②が当て嵌まる。体験活動を行う室内の環境によって伝えようとする中で、参加者が主体的に情報を収集することができ、印象や記憶に残りやすいと考えた。人的環境としては、学生スタッフが役割を分担し、積極的に参加者と関わりやすいようにした。本校に通っている学生の姿を見るだけでなく、実際に関わられるようにすることで、学生の前向きな態度や明るく優しい雰囲気が伝わり、本校に親しみをもちやすいと考えた。

環境構成の③④⑤は、環境を通して幼児教育の雰囲気を味わってもらうことを意図したものである。また、保育・幼児教育の面白さは非常に多様であるが、今回のイベントでは、「偶然の色や形を楽しむ遊びの楽しさ」を感じることを活動のねらいとした。風鈴の制作では、体験を形にして持ち帰られるようにすることで、成功体験による満足感を感じると共に、オープンキャンパスでの体験がより印象に残ると考えられる。マーブリング技法の体験では、どのような色や形になるのか期待し、マーブリング液に絵の具を垂らす姿が見られた。短冊を引き上げた際には、予想外の模様で驚き、楽しんでいるようであった。時間に余裕があった参加者には、追加で新しい短冊を渡した結果、夢中になって取り組んでいた。

乳幼児の造形表現は、偶然の色や形を楽しむことから始まることが多い。自分の操作によって生まれた色や形を見たり、できた喜びを周囲の大人と共有したり、できた色や形を何かに見立てたりしながら、造形表現が豊かになっていく。そういった子どもの発達過程を説明することで、保育・幼児教育に興味をもってもらえるのではないかと考えた。説明を行うと「可愛い」と呟いたり、乳幼児の姿を思い浮かべるように笑顔を見せたりする参加者がいた。また、夢中になって遊んでくれていた参加者の姿を取り上げ、保育・幼児教育の中の遊びは、夢中になれることが子どもの育ちにおいて重要であり、保育者の仕事は、子どもがのびのびと遊べる環境を整えることであると説明した。参加者自身が活動を楽しむだけでなく、保育・幼児教育の面白さにも思いを馳せてもらえたのではないかとと思われる。

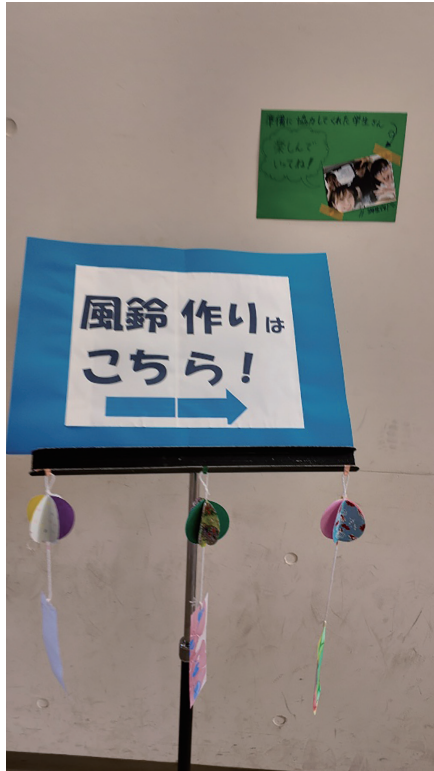
#### ■今後の課題：

マーブリング液の処理や入れ替えに時間と労力が掛かってしまったことが第一の反省点である。今回の活動で使用した絵の具は、風鈴らしい色合いを出すために、食器用洗剤とアクリル絵の具で手作りをしたが、マーブリング専用の絵の具を使用すれば、マーブリング液に洗濯糊を混ぜる必要がなく、水だけで造形遊びができたため、扱いが簡単であった。使用する素材の扱いの簡便さは、活動の円滑な進行に直結し、参加者の体験の質に影響する。次にマーブリングをする機会があれば、マーブリング専用の絵の具を購入する必要がある。

また、風鈴制作の準備に膨大な時間がかかってしまった。善意で協力してくれた学生の力添えで準備が完了したが、オープンキャンパスの準備を行った教員に、他の業務への影響が出てしまった。今回の反省を次に生かしていきたい。

今後の課題としては、参加者の感想をフィードバックしてもらうことである。ねらいを立て、それが達成されるように工夫をしたが、達成されたかどうかは、参加者がどのように感じ、何が印象

に残ったのかを調査することで明らかになる。今後は、イベント内容の改善に資する質問項目を検討する必要がある。



(横田)

### (3) 8月の試み ―物語の世界を体験しよう

―パネルシアター『イグアナレストラン』観劇とイグアナ君への誕生日プレゼント製作

■担当者と学生スタッフ：田岡由美子、山本智子、3年生4名、1年生2名

■参加人数：高校生約45名とその保護者

■実施日時：8月23日（土）第1回13：20～14：20、第2回14：30～15：30

■実施場所：2号館3階312号講義室

■目的：

- ①くらしき作陽大学での学生生活を疑似体験し、保育・教育の学びに興味や意欲をもつ。
- ②パネルシアター『イグアナレストラン』の観劇と誕生日プレゼント作成に参加し、物語の楽しさを体験しながら、保育・幼児教育に関心をもつ。

■内容：

第4回のオープンキャンパスのイベントは、ワニの手遊びとパネルシアター『イグアナレストラン』の上演であった。パネルシアターとは特殊な布を巻いたパネルボードの上にPペーパーと呼ばれる不織布で作った絵人形を貼ったり、はがしたり、動かしたりしながら展開する人形劇のことであり、保育でよく使用される児童文化教材の一つである。この日はスタッフの学生1名がグランドピアノをバックミュージックとして弾き、歌や劇を盛り上げる工夫をした。

また、入室前から何が始まるのかなというワクワク・ドキドキ感を参加者に味わってもらえるように、環境構成の一つとして、講義室の外の廊下に、物語の主人公であるイグアナの友達として新聞紙で作ったワニをたくさん並べて、道案内役をさせた。

参加者全員が着席したところで、まず学生スタッフと教員が、名前、好きなこと、なぜ作陽に入学したか（学生）、あるいは本校のいいところを書いた（教員）画用紙を掲げながら自己紹介した。

これは参加者にくらしき作陽大学の学生や大学生生活を身近に感じて、親しみを持ってもらうためである。

次に、パネルシアターを用いて展開される物語世界へのいざないとして、1年生スタッフ2名がワニの手遊びを行った。手遊びを終えると、ワニ役の1年生2名が「イグアナさ～ん」と物語の主人公であるイグアナに声をかけ、イグアナの登場という流れにした。こうしてイグアナがパネル台の上部から飛び出てきて、パネルシアター『イグアナレストラン』（3年生4名が担当）の物語が始まった。ピアノ伴奏による歌や曲も交えながら、部屋全体が明るく楽しい雰囲気に包まれるようにした。

さらに観劇終了後、森の動物たちに次々と誕生日のお祝いを行った側だったイグアナが、実はこの日自身の誕生日であったことを視聴者である高校生に話しかけ、主人公のイグアナの喜ぶプレゼントをPペーパーに描いて、それをパネルに張り付けながらお祝いしようと誘いかけた。これは、高校生も参加できるようにというねらいである。プレゼントの一例として、事前に学生スタッフがPペーパーに描いた花束や洋服、おもちゃ等々を準備しておき、「イグアナ君、おめでとう」と言いながら、次々にパネルのボードに貼って見せた。その後高校生に書いてもらった。その際に参加者が多かったため、事前にパネル台を部屋の正面と左右の横に3台置き、時間内に全員がお祝いできるようにした。高校生全員がプレゼントを貼っていった。全員がイグアナにプレゼントを渡したところで、みんなで「Happy birthday」の歌をピアノ伴奏に合わせて歌い、物語『イグアナレストラン』と誕生日プレゼント製作を終えた。

最後に担当教員から、幼な子は物語を見たり聞いたりするときにはただの聞き手ではなく、物語の中に入り込んで、主人公をはじめとする登場人物と同じ心持ちを体験していることを話した。だからこそ、物語が終わったあとに子どもが発する「もう一回読んで!」「もう一回見たい!」というリクエストは、たとえ同じストーリーだとしても、子どもは新たな気持ちでその都度、その都度物語を生き直していることを伝えた。

翻って、現在、保育・教育現場において誕生会はいずれの園でも実施されている行事であることを確認した。その際、保育者にとっては同じ事の繰り返しだが1年に12回実施されることではあるが、他方、子どもにとっては、1年の中で一度だけ自分が主人公になれる貴重な機会なのであり、どんな子どももその日を楽しみに待っていることを説明した。だからこそ子どもの生（いのち）が生まれ出たこと、その生（いのち）が今を生きて在ること、そしてその生（いのち）の今後の成長を願う気持ち等々すべてをひっくるめて、その場にいる全員でその子の生（いのち）の誕生を寿ぐことが大切であると話し、まとめとした。以上が60分の模擬保育の内容である。

#### ■振り返り：

上記の模擬保育を振り返って、以下に課題3点を記す。

##### ・ 高校生が絵を描くことの難しさ

高校生がプレゼントの絵を描くことは、思いのほか時間を要した。幼児であれば形にとらわれず、即時に思いのままに書き上げるところだが、Pペーパーを前にして考え込む高校生の姿が意外に多かったことに驚いた。それは「プレゼントを何にしていいいのかわからない」、「どう描けばいいのかわからない」、「変な仕上がりだったらどうしよう」等々といった高校生のリアルな心情だったのかもしれない。あふれる思いや気持ちのままにすぐに動く幼児とは異なる、大人な高校生の姿を見た思いがする。そのため、筆者は、途中で「スマホを出して、姿・形を確認してもいいよ」と声をかけた。筆者が思う以上に、プレゼントを何にするか決めること、そして見知らぬ人の中で絵を描くというのは難しい作業なのかもしれないと感じた。

##### ・ みんなで場を共有してお祝いすることの難しさ

参加者が大勢だったため、高校生一人ひとりがお祝いする場や言葉かけの場面があいまいになってしまった。筆者としては、前に出てそのたびに「おめでとう」という言葉をかけてほしかったが、パネルの土台に貼るだけで席に戻る高校生も多数いた。これらの高校生は周囲の人々からは注目さ

れずに気軽だったのかもしれないが、物語の一部となって体験してほしいというこちらの思いからは、ずれてしまった。

ただ、2回目の上演では、観客が高校生の親子2組であったが、付き添いのお母様も張り切ってイグアナコックさんの帽子を描いて、それを前に出て貼ってくださり、その際に言葉のやり取りを通して、学生スタッフの演技手と参加者が楽しんでいた。参加人数が少ないことが、逆にのびのびと楽しめることにつながったのかもしれない。偶然集った高校生とその保護者という見知らぬ状況では、突然に物語の世界が広がってもそこに入りこむのは、難しいのかもしれない。模擬保育への参加は、個々に高校生が学生スタッフとのやりとりを楽しみ、最後に全員と一緒に「Happy birthday」を歌うだけで十分と言える。

・二部制にするか否かの判断

高校生の模擬保育参加に関して、どうしても1回目の参加者が多くなってしまい、たとえ二部制にしても均等の参加にはつながらなかった。参加した高校生に受け身だけでなく自ら何かを体験してほしいと願うと、人数制限をせざるを得ない。しかし、他のイベントとの兼ね合いや時間的制約もあり、たとえ参加者過密状態でも1回のみでの模擬保育にするのか、人数制限して2回にするのかの判断は難しいと思った。



おわりに

今や自明のこととして、どこの大学でも力を入れて実施されているオープンキャンパスではあるが、その方法や内容はさまざまである。今回、筆者自身はオープンキャンパスの企画・運営を行ってみて三つのことを感じた。

一つ目は高校生の主体的な体験、すなわち自分で選択して、何かを見たり、質問したり、ときには一緒に活動することの重要性である。わざわざ大学に足を運んで大学での学びや生活を体験を通して知ることは、ただ単に見て回るだけよりもずっと印象に残るはずだ。実施する側は、そのためにどのような仕掛けを行うのか工夫が必要である。

二つ目は、学生スタッフの導入・活用の重要性である。参加した高校生は、学生スタッフとの交流、何気ない会話や共に何かを行なうことを通して、大学での学びや生活をより深く感じ取ることができる。何と云っても、来校した高校生は年の近い学生スタッフと話しやすいはずだ。そのため模擬保育・授業の企画・運営を学生とともに行ない、学生スタッフの出番を設け、なおかつ学生スタッフが自ら考えて、高校生目線で働きかける機会を設けることは大切である。ただし、多忙な教員と学生の打ち合わせを行う時間をどのようにして生み出すか、工夫が必要である。

三つ目は学生スタッフの学びである。学生は、最初は漠然とした気持ちでスタッフの一員として参加したとしても、高校生やその保護者との交流や高校生に対して先輩として振る舞うことを通して、自分が高校生の時に持った気持ちを思い出したり、先輩としての誇らしさを感じたり、大学の良さを新たに発見したり、大学がもっとこうあってほしいという気付きを持つなど、確実に成長している。「先生、〇〇したほうがよかった」、「高校生が〇〇のようなことを話していた」「参加して面白かった、また誘ってほしい」等々、終了後に学生スタッフが感想や意見を出してくれることは、そのことを物語っている。そうであるならば、さまざまな学生にこのような機会を与え、以後の学生生活を学生自身が主体的に過ごせるような成長の機会をオープンキャンパスは内包しているといえよう。併せて、教員と学生が1日汗を流した体験は、授業以外で教員と親しくなる機会でもあり、オープンキャンパスと一緒に運営した後に学生と大学構内で出会うと、以前よりも教員と学生の距離が近くなり、親しみが深まったように感じる。その意味でも、学生の活用がただの人手不足解消ではなく、学生自身の成長につながることを見据えた活用を考えることは重要であろうし、常時決まったメンバーではなく、さまざまな学生の登用に心を砕く必要があると感じた。

以上のようにオープンキャンパスは、日頃からお互いに多忙な教員と学生が、協働して非日常の空間を用意し、運営していく力のいる作業である。しかし同時に、教員と学生、学生と高校生にとって成長の場でもあったと感じた。今後も3名の教員と多くの学生達で協力し合い、実りあるオープンキャンパスの企画・運営を考えていきたい。

(田岡)

## 倫理的配慮

本学でのオープンキャンパスの様子をパンフレットや広告等に使用させていただくことについては、各校に了解を得ている。本学の倫理委員会においても審査を受けている。

## 付記

本研究は、令和7年度一般社団法人全国保育士養成協議会学術研究の助成を受けて行われた成果の一部である。